

令和元年6月12日現在

機関番号：35413

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26460835

研究課題名(和文) 地域高齢者の健康格差と主観的健康感に関する研究

研究課題名(英文) Research on the health gap and subjective rated health of the community elderly

研究代表者

山内 加奈子(YAMAUCHI, Kanako)

広島国際大学・心理学部・助教

研究者番号：20510283

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：2016年に愛媛県東温市において65歳以上を対象に悉皆調査を行った。高齢者10,145人を対象に「高齢者総合健康調査」を実施し、6,947人(回答率：68.5%)から回答を得た。身体、精神、社会的側面を含め主として主観的健康感について検討した。対象地域を21の地区別でみた場合、主観的健康感の高群が最も多い割合の地区で47.1%、最も少ない割合の地区で26.4%であった。ただし、主観的健康感の高群地区の方が低群地区より有意に年齢が高かった。この地区別の分析をマッピングすると、新興住宅街よりも既存宅地に居住する高齢者の方が高い主観的健康感であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでに行われてきた主観的健康感の研究は、特定の団体の調査からその団体の特性を明らかにすることが中心であった。しかし、主観的健康感の地域内の格差に重点を置いた研究はまだ少なかった。本調査の結果では、近隣に市役所や健康センターがある地区や旧道付近では主観的健康感が高く、そうでない地区では主観的健康感が低かった。つまり、新興住宅街よりも既存宅地に住む高齢者が多く住む地区の方が主観的健康感が高く、地域の繋がりが健康感に影響している可能性が明らかとなった。これらの結果より、対象地域の行政とともに地区別に求められるものを共有して効率的な施策を提案することが可能になると考える。

研究成果の概要(英文)：In 2016, we carried out an elderly survey into general health for 10,145 residents aged 65 to 84 in Toon City. Of 10,145 residents, 6,947 (68.5%) answered our questionnaire, and the baseline data were derived from the answers. The objective of this study is to shed light on the effect of self-related health (SRH) for elderly on the physical, mental, and social activity. In twenty one communities, there were 10 (47.1%) communities where residents had high level of SRH, 6 (26.5%) communities of middle level of SRH, and 5 (26.4%) communities of low level of SRH. In particular, the age of residents who had been living in the high level of SRH communities was statistically significantly higher than that of low level of SRH communities. We put the communities of three levels of SRH on Toon City map, and it was clarified that the elderly had been living in existing house demonstrate higher level of SRH than those who in new residential area.

研究分野：心理学

キーワード：主観的健康感 地域高齢者 健康格差

## 1. 研究開始当初の背景

主観的健康感は、高齢者保健福祉施策の目指すべき具体指標と考えられている。それは主観的健康感が簡便かつ全体的な健康状態を評価する一つの指標として捉えられているためである。海外の研究では医学的・客観的な健康調査の代替として高い予測妥当性をもつことが明らかにされている。しかし、本邦で地域高齢者に関する主観的健康感の追跡調査を行った論文は、これまでにあまり多く見当たらない。

本邦の主観的健康感の研究は芳賀らのコホートに端を発する（芳賀博，1984）。芳賀らは高齢者を対象に 7 年間追跡調査を行い、主観的健康感と生命予後の関係を明らかにした。その後、横断研究を中心に主観的健康感と配偶者の有無（盛末慶，2007）、生活習慣（川崎道子，2003）（三徳和子，他，2006）、痛み（笠井恭子，他，2001）の関連について検討されてきた。日本の主観的健康感に関する先行研究は、一地域もしくは複数地域で主観的健康感の割合もしくは関連要因の横断調査および縦断調査が実施されてきた。しかし、主観的健康感と生命予後の関連をみた研究は少なく、地域内で主観的健康感の地域差を比較した調査した研究も数少ない。また、本邦では主観的健康感を 10 年以上追跡した調査も少なく、長期に観察した日本人独自の知見を得ることも重要であると考ええる。

## 2. 研究の目的

これまでに、愛媛県東温市で平成 18 年、平成 23 年に 65 歳以上の高齢者約 8,000 人を対象に「高齢者総合調査」を実施してきた。身体、こころの健康、社会的側面に関する悉皆調査を実施し主観的健康感の経年変化や年次推移それに関連する要因を検討してきた。これまでに行われてきた主観的健康感の研究は、特定の団体の全体調査からその団体の特性を明らかにすることが中心であった。しかし、主観的健康感の地域内の格差に重点を置いた研究はまだ少ない。そこで、本研究では既存の調査をベースラインとし、愛媛県東温市の高齢者を対象に、平成 28 年にアンケート調査を行い、主観的健康感に関する地域内差を明らかにし家庭の負担となっている問題を市として効率的な施策が立案・実施できるようにするために取り組むべき課題を明らかにする。

## 3. 研究の方法

愛媛県東温市で平成 18 年（対象者：7,413 人）、平成 23 年（対象者：8,768 人）に実施した高齢者総合調査をベースラインとして、平成 28 年に更に追跡調査を行い以下の四点を明らかにする。

平成 28 年に実施した断面調査で主観的健康感と身体・心理・社会的側面の関連

主観的健康感を 5 年と 10 年の追跡期間で精度に差異があるかどうか

東温市の地域の中での主観的健康感の分布および年次推移について、マルチレベル分析を実施

日本の三大疾患（悪性新生物・心疾患・脳血管疾患）と糖尿病、老衰、全死亡をエンドポイントに主観的健康感との関連

を明らかにする。そのために、厚生労働省に対し人口動態統計死亡小票の目的外使用の申請を行

う。

平成 28 年はデータ収集に加えてデータ入力を開始し，最終年度の平成 29 年はそのデータを分析し，学会発表や学会誌への投稿を行うと同時に地域へ情報発信する。（延長申請し，平成 30 年まで）

#### 4. 研究成果

2016 年に愛媛県東温市において 65 歳以上を対象に悉皆調査を行った。高齢者 10,145 人を対象に「高齢者総合健康調査」を実施し，6,947 人（回答率：68.5%）から回答を得た。身体，精神，社会的側面を含め主として主観的健康感について検討した。

対象地域を 21 の地区別でみた場合，主観的健康感の高群が最も多い割合の地区で 47.1%，最も少ない割合の地区で 26.4%であった。ただし，主観的健康感の高群地区の方が低群地区より有意に年齢が高かった。この地区別の分析をマッピングすると，新興住宅街よりも既存宅地に居住する高齢者の方が高い主観的健康感であることが明らかとなった。つまり，新興住宅街よりも既存宅地に住む高齢者が多く住む地区の方が主観的健康感が高く，地域の繋がりが健康感に影響している可能性が明らかとなった。

これらの結果より，対象地域の行政とともに地区別に求められるものを共有して効率的な施策を提案することが可能になると考える。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計 3 件

1. **Yamauchi Kanako, Saito Isao, Kato Tadahiro (2018) Depression in the elderly in rural areas of Japan and its impact on activities of daily living: a longitudinal survey over 10 years. Bulletin of the faculty of education Ehime university 65; 191-197.**
2. 和田彩那、山内加奈子、斉藤功、加藤匡宏 (2017) 首尾一貫感覚と睡眠および自律神経系機能・健康指標との関連。四国公衆衛生雑誌 62(1); 135-140.
3. 山内加奈子、斉藤功、加藤匡宏、谷川武、小林敏生 (2015) 地域高齢者の主観的健康感の変化に影響を及ぼす心理・社会活動要因：5 年間の追跡研究。日本公衆衛生雑誌 62(9); 537-547.

〔学会発表〕 計 13 件

1. 山内加奈子、加藤匡宏、斉藤功 (2019) 地域在住高齢者のソーシャル・キャピタルと関連するサポートについて。第 29 回日本疫学会。
2. 山内加奈子、小林敏生、加藤匡宏、斉藤功 (2018) 地域高齢者における JST 版活動能力指標と社会・余暇活動への参加数の関連。第 77 回日本公衆衛生学会。
3. 山内加奈子、小林敏生 (2018) 地域高齢者における主観的健康感とソーシャルキャピタルの関連。第 31 回日本看護福祉学会。

4. 小林敏生、安東由佳子、山内加奈子 (2018) 地域在住高齢者の **ADL** と関連要因としてのソーシャルキャピタル (**SC**) および首尾一貫感覚 (**SOC**)。第 31 回日本看護福祉学会。
5. 山内加奈子、斉藤功 (2018) 健康関連 **QOL** の夫婦間相関に関する研究。第 28 回日本疫学会。
6. 山内加奈子、斉藤功、加藤匡宏、小林敏生 (2017) 地域高齢者の主観的健康感に及ぼす **JST** 版活動能力指標と老研式活動能力指標の比較。第 76 回日本公衆衛生学会。
7. 加藤匡宏、山内加奈子、小林敏生、斉藤功 (2016) 地域高齢者におけるうつの有無が生活機能に及ぼす影響～10年に渡る推移から～。第 57 回中国・四国精神神経学会・第 40 回中国・四国精神保健学会 合同学会。
8. 山内加奈子、小林敏生、斉藤功、加藤匡宏 (2016) 愛媛県旧 S 町在住の高齢者における 15 年間の **IADL** 推移について。第 63 回日本公衆衛生学会。
9. 和田彩那、山内加奈子、斉藤功、加藤匡宏 (2016) 睡眠が首尾一貫感覚および自律神経機能に及ぼす影響。第 37 回四国農村医学会。
10. 山内加奈子、斉藤功、加藤匡宏、増田有紀 (2016) 地域高齢者における首尾一貫感覚 (**SOC** : **Sense Of Coherence**) と生命予後の関連について。第 26 回日本疫学会。
11. 山内加奈子、斉藤功、加藤匡宏、小林敏生 (2015) 地域高齢者の主観的健康感の変化とうつ (**GDS**) の関連について。第 62 回日本公衆衛生学会。
12. 山内加奈子、斉藤功、加藤匡宏、小林敏生 (2014) 域高齢者の性格傾向は生命予後に関連するのか～15年半の追跡調査から～。第 73 回日本公衆衛生学会。
13. 山内加奈子、斉藤功、加藤匡宏、小林敏生 (2014) 地域高齢者の主観的健康感と社会参加活動・相談相手の関連について。第 84 回日本衛生学会。

〔その他〕 計 1 件

愛媛県東温市高齢者総合健康調査 報告書

## 6. 研究組織

研究分担者：大分大学・医学部・教授・斉藤 功 (**Isao SAITO**)

研究者番号 **90253781**

研究分担者：愛媛大学・教育学部・准教授・加藤 匡宏 (**Tadahiro KATO**)

研究者番号 **60325363**

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。